

第4章 マゼラン以後の世界

マゼランの世界一周航海によって世界の海が一つにつながった。マゼランまではひたすら未知との戦いであったが、マゼラン以後、航海の危険が減少したわけではないにせよ、海は交通路として次第に開発されていく。ポルトガルはアフリカ南端経由北上するルートでインド洋から東南アジアにかけての香料貿易独占へと先行し、16世紀半ばには日本にまでやってきた。他方スペインは、西インド諸島からアメリカ大陸への進出と植民地支配にまい進する。ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）を拠点に太平洋横断航路を開発して植民地フィリピンを確保し、日本にもやってきた。地理学者によっては、ヨーロッパ人による地理上の《発見》という表現に異を唱える人もいるが、まさしくヨーロッパが最初にローカルな存在から抜け出してグローバルな世界を展望し、かつ体験することとなった。そこには、ギリシャ・ローマ以来の全人類を見通す発想や、キリスト教の世界観が作用していたのであろう。

大航海時代に先陣をきったポルトガルとスペインは、それぞれが獲得した貿易ルートと植民地をそれぞれが独占し、地理的な知識も航海のノウハウも他国と共有しようとしなかった。それどころか、自国の支配地域に入ってくる他国の船は敵として排除し、容赦なく攻撃した。

後発のオランダ、イギリス、フランスはトルデシリアス条約などにとらわれず、ポルトガルとスペインに挑戦する。植民地での抗争は必然的に本国どうしの戦争にも結びつき、国としての競争の中から絶対王政の国家が誕生していく。他方、カトリック教皇を擁するイタリアの都市国家・諸侯と、キリスト教圏の名目的世俗支配権をもつ神聖ローマ帝国のドイツ諸侯は統一国家をもつことができず、小邦小国に分立したまま新世界進出に乗り遅れてしまう。

本章ではまず、ヨーロッパの海外進出によって世界が一つになっていく過程を中心に旅と航海を見て行こう。

ポルトガルの海外帝国とアジア

ポルトガルは16世紀前半にアフリカ沿岸一帯からインド、マラッカ海峡を経て香料諸島に至る広大な地域にいくつもの拠点を確保し、王室による国家事業としてアジアにおける交易と市場開拓に注力する。人口100万人ほどの小国ポルトガルが既存の勢力を武力で排除しながら通商路を確保し得たのは、ポルトガル以前に香料貿易を支配していたイスラム化したインド商人たちが、国家権力の後ろ盾をもたない商人たちであり、大砲・小銃という新兵器を含む完全武装のポルトガル商船に太刀打ちできなかったのが最大の理由である。また、国の保護を求めようにも、当時スエズ以東を支配していたエジプト、ペルシャ、南インドなどの諸国は強力な艦隊を持たず、大国も積極的な海事政策を放棄して鎖国主義（海禁）をとり、さらに、インド洋からマライ諸島に至る小王国群は互いに相争い、団結

してポルトガルに対抗することがなかったからである。

16 世紀の中ごろにポルトガルの領土は最大規模に達したが、現地住民の多いアジアでは内陸にまで支配力を及ぼすことができず、領土というより《香料独占》の目的意識に貫かれた海岸沿いの要塞と倉庫のつらなりに過ぎなかった。その中でとくに重要拠点とされたのが南インドのゴア、マラッカ海峡中央部のマラッカ、香料諸島のテルナテであった。それでもポルトガルは、トルデシリアス条約の示す子午線の東側のブラジルの領有を含め、16 世紀を通じて空前の海上帝国を築いていた。ポルトガル人の足跡は 1543 年に種子島に漂着して日本に火縄銃をもたらしたことで知られ、1549 年鹿児島に上陸した宣教師フランシスコ・ザビエルが日本を訪れた最初の西洋人となった。のちにマカオにも拠点を設置 (1557 年) して日本との交易 (香料ではなく中国の絹と日本の銀) を開始することになる。

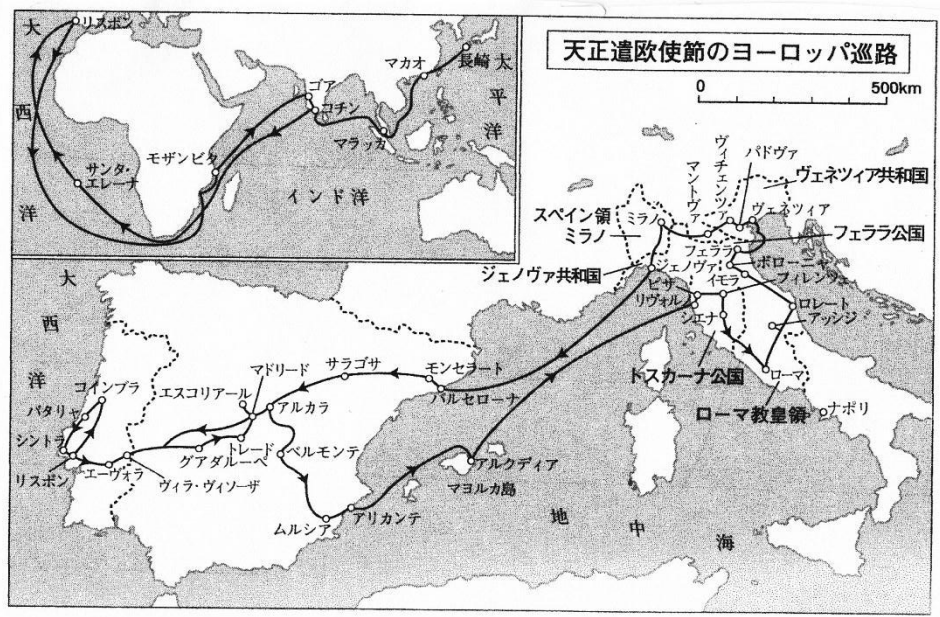
ポルトガルの香料貿易の独占支配は、航海情報や市場情報を極秘にし、ライバル国に知らせないことによって成り立っていたが、やがてオランダとイギリスの台頭によって独占支配は終了する。

フランシスコ・ザビエルの布教の旅 アジアにおける独占的な叙階資格を教皇から得ていたポルトガル王 (当時ジョアン 3 世) は、アジア進出に成功すると、キリスト教の布教をイエズス会 (1537 年設立) に委託した。イエズス会は 7 人の創設者の一人であるフランシスコ・ザビエル (1506? ~ 1552) をアジアに派遣することを決め、ザビエルは他のイエズス会員 3 名とともに、1541 年 4 月 7 日アジア布教のためにリスボンを出発した。その年の秋と冬はアフリカ東岸のモザンビークで過ごし、翌 1542 年 2 月に同地を出発して 5 月 6 日にゴアに到着、ゴアを拠点にインド各地で布教活動を行った。1545 年にはマラッカ、1546 年にはモルッカへと移動して、それぞれの地で布教を行った。ザビエルは、モルッカの布教からマラッカへ戻ったとき鹿児島県出身のヤジロー (またはアンジロー) という日本人の青年武士に出会い、日本への布教を決意したという。1548 年にゴアで宣教総督になったザビエルは、1549 年 4 月 15 日、二人のイエズス会員と、すでにキリスト教徒となっていたアジア人数名 (インド人 1 名、中国人 1 名、および洗礼を受けたばかりのヤジロー) を伴ってジャンク船で日本に向けてゴアを出発した。同年 9 月には鹿児島に上陸し、2 年間日本で宣教活動を行った後、4 人の改宗日本人青年を選んでゴアに伴っている (1552 年)。このうちの 2 人は在ゴアの司祭養成学校「聖パウロ学院」で学び、一人は病死するが、残る日本人ベルナルドは同学院で学んだあと、ヨーロッパの土を踏む最初の日本人となった。ザビエルは日本全土に布教するには中国での布教が不可欠と考えて中国に赴くが (1552 年)、広東省の上川島で布教の許可を待つうちに病没した。本国出発以来二度と故国に帰ることのない 46 歳での死であった。

マルコ・ポーロによってミステリアスな黄金の国と紹介された日本は、ついに宣教師たちによってヨーロッパにその実情を紹介された。日本からは九州のキリシタン大名による天正少年遣欧使節 (1582~90 年)、さらに伊達正宗による支倉常長の慶長遣欧使節 (1613~20 年) がそれぞれ訪欧して教皇に拝謁し、日本人も彼らに知られることになる。ちなみ

に前者はポルトガルの支援によるものであったから西回り航路をとり、インド洋経由アフリカ南端を回ってリスボンに至り、スペインを経てローマへ向かう旅であった。これに対し、後者は、フィリピンに拠点を置いていたスペインの支援による派遣であったから、東回り航路で太平洋経由メキシコ（アカプルコ港）へ行き、陸路カリブ海へ出てスペイン艦隊の船でセヴィリアへ、そこからローマへ向かっている。どちらも日本からの使節として大歓迎を受けたことが多くの文献に残されている。大航海時代の末期に早くも日本人がヨーロッパに登場したのだが、まずは16世紀のうちにヨーロッパに姿を見せ、ヨーロッパの歴史に記録をとどめた天正遣欧使節の旅を、主として松田毅一「天正遣欧使節」から紹介しよう。

天正遣欧使節 天正遣欧使節とは、1579年に来日したイエズス会の宣教師ヴァリニャーノ（1539～1603）の発案により、伊東マンショ、千々石ミゲルら九州の田舎の6少年が1582年2月に長崎を出帆し、1590年7月に帰国するまでの8年半の長きにわたるヨーロッパ訪問の旅であった。少年使節一行は、ポルトガル・スペイン国王やローマ教皇らに拝謁し、東洋の島国日本を知らしめる快挙を成し遂げた。ヴァリニャーノはイタリア人で、1573年にイエズス会総長の代理で東インド（アジア地区）の巡察師に抜擢された人だが、アジアにおけるポルトガルとスペインの争いに配慮した人選であったと言われる。ヴァリニャーノが日本にやってきたのは1579年で、ザビエル来訪後30年が経っており、西日本各地に十数万人のキリスト教徒が誕生していた。ヴァリニャーノは、将来日本の教会の司牧は日本人に委ねるべきであると考え、1580年に少年たちを教える学校〈セミナリオ〉を有馬に設置し、生徒の募集を始めている。ヴァリニャーノがセミナリオ第一期生の中から4名を選んで大友、有馬、大村三侯の名代として欧州に派遣しようとしたのは、自身が日本巡察を終えて長崎を発つ直前であった。選ばれた少年たちの年齢は13～14歳であったろうという。



使節派遣の目的は、日本人の若者たちに優れたヨーロッパの文物を見せ、帰国後日本での布教に役立つもらうためであった。使節団一行は巡察師ヴァリニャーノを団長に、修道士ディオゴ・デ・メスキータ、修道士ファン・サンチェス、日本人修道士ジョルジョ・デ・ロヨラの3名の付き添いにより、正使に伊東マンショと千々石ミゲル、副使に原マルチノと中浦ジュリアン、ほかに日本人少年2名の総勢10名であった。1582年2月20日長崎で乗船し、17日後に極東におけるポルトガルの拠点マカオに入港した。マカオは狭い地区で、今日マカオを代表するポルトガル遺跡となっている聖パウロ教会もまだ建てられていない殺風景な町であった。使節団はマカオに3月9日から12月31日まで10か月弱滞在している。ここに滞在しているときに、ポルトガル王家の血筋が断絶し、スペイン王フェリペ二世がポルトガル王を兼ねることになった政変が伝えられたからである。ポルトガル王とローマ教皇に謁見することが最大の目的であったから、日本の諸侯からの書簡の宛先・内容を変更しなければならなかったのである。

次の目的地マラッカでは司教や総督の盛大な出迎えをうけ、1月27日から2月4日まで滞在した。次いでインドのゴアへ向けて船出したが、インド洋に出た後嵐ならぬ風の災難にみまわれる。風がなければ船は進むも戻るもままならず、熱風が充満し、食物は腐敗し、病人が続出した。伊東マンショも疫痢にかかり、すんでのところ命を落とすところであったという (p94)。マラッカを出てから、実に52日もかけてインド大陸南端のコモリン岬付近のマラバル海岸に上陸した。少年使節たちは蘇生する思いで久しぶりの大地を踏み、原マルチノは「その喜びは言語に絶するものであった」と語っている。コチンに着くと、雨季のためゴアまで航海を続けることが不可能と分かり、ここに4月初旬から10月まで7か月も滞在せざるを得なかった。健康を回復した少年使節たちは、ヴァリニャーノの指示によって、この地で西洋音楽やポルトガルの歴史などを学んだ。

11月の初旬にようやくゴアに到着したが、ヴァリニャーノと少年たちを悲しませたのは、自ら少年使節を連れてローマへ赴くつもりだったヴァリニャーノが、ローマのイエズス会総長の指示でインド管区長としてゴアに留まることを命じられ、使節に同行することができなくなったことである。ヴァリニャーノは先行きを心配し、使節団の受け入れについて細部にわたる指示を与えている。使節団は、ヴァリニャーノとの再会を祈念しながら、香料などを積めるだけ積んだサンティアゴ号に乗ってゴアを出発し、インド洋を南下する。アフリカ南端を回ってリスボンに至る航海は、ポルトガルにとっては手慣れた航路であるとはいえ、順調に行っても6か月はかかる大航海である。

喜望峰を回って17日目に待望のセントヘレナ島に着いた。ここは絶海の孤島だが、1502年にポルトガルの航海者ジョアン・デ・ノヴァが発見して以来、果樹、植物が移植され、長い航海後の人々にとって天国とも地上の楽園とも見えたという。清冽な溪流、数々の果樹、山羊、野豚、野鶏、しゃこ、鳩などの鳥獣、釣り糸を垂れただけで群がってくる魚の見事さ。息絶え絶えになっていた船上の病人たちもみるみる元気を取り戻した（p 127）。百科事典ブリタニカの1911年版には、1584年に2名の日本人使節がヨーロッパに向かう途次にこの島を訪れたと記載されているという。

楽園の島を出て一路リスボンに向かうのだが、当時すでに香料などの財物を満載して帰国してくるポルトガル船は、フランス、イギリス、ネーデルラントの海賊たちの絶好の獲物であり、直行は危険なため北方に大きく迂回するコースをとったのだが、この間の航海だけで32名が死亡して水葬された。故郷を目前に倒れた仲間たちのためのミサが続き、彼らを悼む慟哭を聞いて、日本の使節らの想いはいかばかりだったか、と松田が述べている。

ともあれ、1584年8月11日、正副4使節にロヨラ修道士と2名の随員合わせて7名の日本人は無事リスボンに到着した。長崎を出てからすでに2年6か月の歳月が流れ、少年使節も15、6歳になっていた。ポルトガルでは王家が断絶してスペイン王フェリペ二世がポルトガル王を兼ね、王の甥のアルベルト・アウストリア枢機卿が名代として統治していた。枢機卿は王宮に使節たちを迎え、彼らを高貴の者として丁重に扱った。リスボンで長旅の疲れを癒し、市内を見物し、夏のシントラ離宮に招かれたりしたあと、9月5日、ローマへの道程に旅立った。スペインでは旧都トレドに立ち寄った後、11月25日にマドリードの王宮でフェリペ二世に謁見、歓待を受け、一路イタリアに向かう。1585年3月7日にフィレンツェでメディチ家招待の舞踏会に参加し、誘われて伊東マンショが貴婦人とダンスをして喝采を受けた。

旅行中最高のハイライトである3月23日のローマ教皇グレゴリウス13世の謁見は、通常の個人の謁見ではなく、少年使節のために全枢機卿、全外国大使参列の正式の歓迎式典として行われた。その理由は「教皇陛下は、われわれの訪問を全キリスト教国の、共通の事件とお考えになったのです」（ミゲルのことばより）。かくて、少年使節の教皇謁見は歴史上初めて全ヨーロッパが日本人に注目する大舞台となった。その模様をNHK「その時歴史が動いた」第32巻の『世界が日本を知った日』の記述を借りて再現すると、次のような具



教皇に謁見する伊東マンショ

合であった。少年使節はローマ兵、楽隊、華やかに飾られた馬車が連なる 3 キロメートルにも及ぶ行列に先導され、ヴァチカンに向かった。沿道には数千人の見物人が溢れ、方々から祝砲が打ち鳴らされた。…ローマのイエズス会神父が、教皇に日本の使節来訪の意義を伝えた。「教皇猥下、知られざる土地日本は確かに存在します。そしてそこには、ここに見るとおり、われわれにも劣らぬ優れた人々が暮らしています。彼らは世界の果てなる日本からはるばる旅をし、猥下のもとにひざまずいたのであります。今日この日、猥下はその目でこの果実を見、その手でこれに触れることができます。」……教皇は涙を流して少年たちに語りかけた。「帰依した日本人のすべてを庇護し、日本のことを将来にわたって常に心にかけ、またそれらを充実させるため、たゆまぬ努力を欠かさぬであろう。」

日本からの少年使節団の来欧と教皇謁見の反響は大きかった。松田によれば、使節が滞在していた 1585 年だけで使節に関する書物が 48 種も発刊され、93 年分まで数えれば 90 種以上が刊行されたという。それにヴァリニャーノをはじめ、イエズス会の関係者による旅の経過や使節団の行動、周囲の人々の反応などの記録が膨大に残されており、これらのおかげで使節団の旅の様子がよくわかる。これに対し、日本側ではこと志と違って、使節の留守中に豊臣秀吉によって宣教師の追放などの鎖国体制が始まり、資料もほとんど廃棄され、痕跡程度しか残っていない。近代ヨーロッパが誕生する初期の東西交渉史の中での快挙といえるこの使節団の記録は、日本ではキリシタン弾圧のもとで抹殺に近い扱いを受けたのであった。

さて、教皇謁見が終わると、使節団はイタリア各地を訪問し、前掲図の通りジェノバからバルセロナへ船で渡り、陸路リスボンに戻った。すべての日程を終えて、1586 年 4 月 13 日、ブラジルやインド行きを含む大船団の一隻サン・フェリペ号に乗って思い出多いヨーロッパを後にした。1 年 1 か月後の 1587 年 5 月 29 日にゴアに帰着し、首を長くして使節団を待っていたヴァリニャーノに再会した。ラテン語を一番話せた原マルチノが旅の報告と、このような企画を発案・実施したヴァリニャーノへの感謝の演説を行った。日本での

布教は、彼ら使節団の若者が中心になって日本語で行うことができるとヴァリニャーノは喜んだ。しかし、使節団と日本での布教に新たに参加する 17 人のイエズス会士らがマカオまで来てみると、日本の事情は様変わりしていた。彼らの長崎出帆直後に宣教師の活動に理解を示していた織田信長が本能寺の変に倒れ、大村純忠も大友宗麟もすでに亡くなっていた。そのみか、1587 年に豊臣秀吉がスペイン人の植民地政策とキリスト教の布教を警戒して、宣教師の追放を命じたことを知らされたのであった。

それでもヴァリニャーノは日本での布教を諦めず、秀吉への面会の許可を得て、1590 年新たに使節団を率いて再訪した。秀吉と面談することはできたものの、結局少年使節団の帰国後の運命はみじめなものであった。伊東マンショは 1612 年に病死し、原マルチノはマカオに追放されて 1629 年に現地で病死、千々石ミゲルはキリスト教を捨てて消息を絶ち、中浦ジュリアンは長崎で刑死した。

松田は少年使節たちの苦闘の跡を辿るべく敢えて試みた同行程の船旅の経験から、言葉もよくわからず、食事をはじめとする習慣が異なる異国を、13, 4 歳という若さで故郷を離れ、8 年の長きにわたって旅を続けた勇氣と忍耐を称えている。たとえば、食べ物については、九州の田舎で育った少年たちにとって南蛮のご馳走は必ずしも口に合わず、いろいろ苦勞した様子を、食べ物の項を設けて詳しく解説している。

日の沈まぬ国スペイン

カスティリア女王イザベラ（在位 1474～1504）とアラゴン王子フェルディナンドが結婚し、そのフェルディナンド王子が 1479 年にアラゴン王に即位してフェルディナンド一世となったことによって両国が統合され、スペイン王国が誕生した。両王の娘ファナ・ラ・ロカが神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世の息子フィリップ一世（ブルゴーニュ公でありネーデルラントを領有していた）と結婚し、その嫡男として生まれたのがカルロスである。カルロスは 1516 年にスペイン国王カルロス一世となり、スペインとネーデルラントの王となった。さらに、1519 年フランスのフランソワ一世と神聖ローマ皇帝位を争って勝利し、皇帝カルル 5 世となった。これによりカルロスはスペインとその海外植民地、ネーデルラント、ドイツ南部を支配する強大な支配地域の君主となった。

ポルトガルが香料貿易の拡大に汲々としている間、スペインはカリブ海から今日のメキシコや南米大陸内部に侵入し、北米では東のフロリダ半島、西は今日のアリゾナ州からカリフォルニア州にまで進出していった。そして、17 世紀には太平洋航路を開拓してフィリピンを支配し、アジアにまたがる巨大な植民地帝国をつくりあげるのである。

マヤ・アステカ・インカ 後世の歴史学・考古学の調査によれば、コロンブス到着時の巨大なアメリカ両大陸の人口総数はわずか 1600 万人程度で、中南米に約 1500 万人、北米（現在の米国以北）には 100 万人ほどしかいなかったと推定されている。ユーラシア大陸とは文明の接触がなく、アメリカ大陸の居住民は、①狩猟採集の草原の民、②焼畑移動農耕の森林の民、③定住農業が始まって一歩進んだ社会状態の^{チーフダム}首長国、④首長国どうしの争いから

誕生した^{キングダム}王国の4通りの社会があった。第4段階の王国が誕生していたのは両大陸を通じてわずかに2か所、中米の現在のメキシコとグアテマラ（テオティワカン、マヤ、アステカ）と、南米アンデス山中のペルーとボリビア（インカ帝国）のみであった。王国以前の首長国レベルに達していたのがコロンビア、コスタリカ、パナマ、そしてカリブ海のタイノ人の国くらいであった。

スペインは、マゼランに太平洋への出口を探させる一方で、発見された新大陸の探検を順次進めていった。エスパニョーラ島やキューバ島などのカリブ海の島々の人々は、彼らにとって文明以前の存在であり、さほどの財宝も持たず、植民者は期待外れでいらだっていた。そうした彼らの犠牲になったのがメキシコのアステカ帝国であった。ユカタン半島にスペイン人が初めてたどり着いたのは1517年だったが、この時彼らが出会った住民のマヤ族は、裸で暮らすカリブの島民と違って「木綿の着物を着、軽い白の下着と耳輪をつけ、メダルその他の金の装身具を首から下げている」のを知った（増田義郎「大航海時代」p100）。新しい文明の発見にスペイン人は湧き立ち、翌年改めて探検隊を出してみても、ユカタン半島の西の内陸部にさらに豊かな国アステカがあることを知った。キューバ総督の命によって、フェルナンド・コルテスが500人余の兵と100人の水夫、14門の砲、16頭の馬を乗せた11隻の船団を率いてユカタン半島に向かったのは1519年2月10日であった。タバスコ地方でマヤの数万の大軍と会戦して圧勝し、スペイン人は〈騎兵〉の想像以上の威力を知ることになった。メキシコには馬や牛などの大型獣がおらず、マヤ人たちは騎兵を人馬一体の怪獣と考え、疾走してくる姿に恐れおののき、なすすべを知らなかったという。コルテス軍はさらに西進し、曲折を経て1521年末には人口20万人を擁するといわれたアステカ王国の首都テノチテラン（現在のメキシコシティ）を襲い、10万人を殺戮して財宝を奪い、ここを根拠にしてアメリカの植民地支配に乗り出していった。

北方への探検隊は、東はフロリダ半島へ、内陸部は現在のニューメキシコ州からアリゾナ州方面へ進出した。さらに海路カリフォルニア方面にも送られたが、アステカやインカのような文化や財宝はどこにもなく、見出したのはみすばらしい村々に過ぎなかった。踏破した広大な地域はヌエヴァ・エスパーニャ（新スペイン）と名づけられ、スペイン王国の植民地となった。

1531年には、ピサロをリーダーとする180人と37騎が3隻の船に分乗してインカ帝国に乗り込み、20万人の人口を擁するインカ帝国の首都クスコを攻めた。ここでも現地勢力はレコンキスタで鍛えたスペイン軍の武器や戦術にまったく歯が立たず、またたくまに征服されてしまった。金銀財宝は奪い放題となり、現地の人々は虐殺された。アンデス山中のインカ帝国は総人口1000万人の大帝国で、その後も長らく抵抗を続けたが、二度と国が復活することはなかった。

南米東海岸 他方、現在のアルゼンチン、ウルグアイの大平原に侵入したスペイン人たちは過酷な運命に出遭うことになった。1535年ペドロ・デ・メンドーサが千数百人の植民者を率いてラプラタ川の岸に上陸したとき、彼らを待ち受けていたのは飢えであった。今で

こそアルゼンチンの大地は小麦の宝庫だが、16世紀の当時は農耕を知らないわずかの採集狩猟民族が住んでいただけだったから、持参した食糧が尽きると住民から略奪しようにも食糧自体が存在しなかった。アメリカ大陸への植民初期には同じような悲劇に陥ったケースが少なくない。メンドーサが一時築いた町ブエノスアイレスは放棄され、一部のスペイン人がパラナー川を奥深く遡って見出した農耕民のいる地方（現在のパラグアイ地方）でやっと息をつくことができた。ここに建設されたアスンシオンが南米開拓の中心となり、ラプラタ河口に戻ってブエノスアイレスを再建したのは40年後の1580年であった。

カリブの海賊：フランスとイギリスの挑戦

スペイン植民地軍は、最初のアステカ遠征（1521年）の大勝利を本国のカルロス一世に報告すべく、奪った財宝を三隻の船に満載して送り出したが、皮肉なことにこの時の戦利品は目的地に届かなかった。アゾレス諸島付近でフランスの私掠船に遭遇し、拿捕されてしまったからである。積まれていた財宝は黄金や銀の装身具、ハシバミの実ほどの大きさの真珠、ヒスイの小立像、儀式用コスチューム、羽根の着いた頭飾りなどの工芸品から、生きたジャガー3頭に至る珍しいものばかりであった。だが、これらの豪華な財宝を楽しんだのはマドリードの宮廷ならぬフランスの海賊であり、海賊のボスの館で盛大な勝利の祝典が開かれ、これらの戦利品が陳列されたという（大航海時代 p 25.）

さて、スペインはトルデシリアス条約によって、ブラジルを除く中南米全域の占有権を主張し、宗主国として旧世界から海外領土を隔離し、利益を独占しようとした。また、旧教国スペインは、すべての異端者、とくに新教徒の海外領土への侵入を王命によって禁止していた。しかし、ヨーロッパでスペインと対立するフランスをはじめ、新たに台頭してきたイギリスやオランダがこのようなスペインの独占を認めるはずがなかったから、植民地をめぐる紛争が起きるのは当然であった。その初期の戦闘は主としてアメリカ植民地への入り口であるカリブ海を舞台に行われた。いわゆるカリブの海賊の活動である。

J. マホウスキ「海賊の社会史」（田辺稔訳）およびデイヴィッド・コーディング編「海賊大全」（増田義郎他訳）などによれば、スペインがアメリカから持ち帰る財宝を奪う私掠船や海賊の活動は、スペインに挑戦した主たる国の違いから、概ね3段階に分かれるという。ちなみに、私掠船とは戦時委任状（または拿捕許可状）によって敵性国の商船を拿捕することを公認された武装船のことである。私掠船と呼ばれる理由は、それが君主や政府の艦船ではなく、個人所有の私船だったからで、政府にとっては戦時の海軍力を増強する安価な方法であった。それゆえ、平和が訪れれば彼らの活動は違法な海賊行為と見做されるのだが、国王の権力がまだぜい弱だった時代のことで、私掠船は当初から勝手に活動していた。したがって、戦争終結後も私掠行為をやめるはずはなく、その行動に必ずしも明確な相違はない。あるいは、私掠船と本物の海賊の違いをはっきりさせることは難しいといったほうがよいかもしれない。

フランス・ユグノーの私掠船 第一の段階はフランス・ユグノーの私掠船時代である（1530

～1559)。宗教戦争の時代で、領民は領主の選ぶ宗教に従わざるを得ず、自分の信仰を曲げなければその土地に住むことができなかった。それゆえカトリックが支配的だったフランスで新教を選んだ領民（ユグノーと呼ばれた）は、やむを得ず新教地域へ移住したり、海上に出て活動したのであった。また、この時期はヴァロア家のフランスとハプスブルク家のスペインが断続的にイタリア各地の領有をめぐる戦争していたから、スペイン船を襲う正当な理由があった。

フランス人が最初に大西洋横断に乗り出したのは1525年頃のことであり、まだカリブ海域の小島群のほとんどはスペイン人の住んでいない島々であった。アステカ文明が発見されて財宝の存在が明らかになると、みじめな生活しかできないカリブ海の居留地に住むスペイン人たちも豊かなメキシコへと出かけ、島々の人口は減少し、原住民は私掠船の襲撃から身を守るすべを持たなかった。そうした状況下に登場したユグノーの私掠船は、海上でスペイン船から財宝を略奪しただけでなく、カリブ海諸島を襲撃して居住民を襲い、財物を奪った。現住民の中には征服と収奪に奔走するスペイン人よりも、新教徒のフランス人の方を歓迎し、彼らと交易することを望むものも多かったという。こうしたことから密輸も増え、スペイン側も取締りを厳しくしたが、フランスからアメリカにわたる私掠船は増える一方で、スペイン西方沖に待ち構えて商品を積んで帰国してくるスペイン船を襲撃した。スペインはやむなく軍艦による護送船団方式を採用し、往路はセビリヤかカディスに集って集団で大西洋を南下し、カナリア諸島脇を通過してカリブ海に向かった。帰路はサント・ドミンゴ島に集結してエスパニョーラ島とキューバ島との間のウィンドワード海峡を通るか、もしくはメキシコからフロリダ海峡を通過してアゾレス諸島経由で本国に戻るといったコースをとった。これによって海の安全は図られたが、スペイン商品の価格が高騰し、物資の不足を招いて密輸業者につけ入るすきを与える結果となった。

16世紀の前半、メキシコやペルーが金銀財宝の宝庫として知られるようになっていたにせよ、大陸発見からわずか2、30年のこの時期に、さしたる装備もない小型の船で大国スペインが渡航を禁じるカリブ海沿岸を目指して出かけるのは命知らずの行為であった。「海賊大全」にはこの時期のフランス海賊とスペイン王国海軍とのやりとりが詳しく描かれている。植民居留地を襲って大なる成果を上げることもあれば、逆にフランスの港まで追跡されて獲物を奪い返されたり、捕えられれば海賊として容赦なく処刑された。後世にまで知られたユグノー私掠船のリーダーとしては、サントンジュ兄弟や義足の海賊フランソア・ルクレール、その手下だったジャック・ド・ドレ、ジャン＝マルタン・コトなどが有名である。フランスの私掠船は、最終的に1559年にカトー・カンブレジ条約によってスペインとフランスの戦争が終結し、他方1562年以降フランス国内の新旧宗教戦争（ユグノー戦争）が激しくなったこともあって、ユグノー側が海賊行為に出る余裕を失って下火になった。もっとも、数は減ってもフランスの海賊はその後も数十年にわたって活動を続けているが、主役が英国の私掠船に代わったのであった。

イギリスの台頭 第二段階はイギリスの時代（1560～1620）である。イギリスの海賊も早

くからカリブ海域に姿を見せてはいたが、本格化するのにはエリザベス一世（在位 1558～1603）の即位以降である。16世紀半ばまでイギリスはスペインと強い同盟関係にあったが（スペインの王女がヘンリー8世の妃であった）、スペインが反宗教改革を主導したこと、アメリカ市場を独占して他国を締め出したことなどから、協調関係が崩れはじめ、さらに新教国イギリスでカトリック教を強制して国民の人気を失ったメアリー一世（在位 1553～1558）の後にエリザベス一世（1558～1603）が即位すると、次第に敵対的な関係になっていく。とくに1550年代末期から1560年代にかけて、スペインのアメリカ植民地で銀の生産量が劇的に増大して豊かになったことが事態の変化を促進した。イギリス海賊の活動はフランス海賊に比べ、はるかに組織的かつ大がかりのものになっていく。

最初に登場したのがジョン・ホーキンス（1532～95）である。父のウィリアム・ホーキンスはヘンリー八世の時代から貿易に従事し、アフリカのギニアからブラジルなどへも出かけて象牙や黄金の密貿易で巨万の富を築き、プリマス市長や下院議員を務める名士の家柄であった。ジョンは早くから父の船で船乗りの修業をし、エリザベス一世が即位した1558年にはロンドンに出て財界人と親しくなり、出資者を得て奴隷貿易に手を染める。彼は海賊として財宝を奪うというより、貿易商人としてスタートしたのであった。1562年にポルトガル支配下にあった西アフリカのギニアへ行き、3隻の船に300人の黒人奴隷を積み込んで大西洋を横断し、イスパニオーラ島の北岸で売りさばいた。奴隷の代金代わりに受け取った商品を持ち帰って大儲けし、あっという間にプリマスの大金持ちになった。黒人奴隷は、スペイン人の無慈悲な搾取による西インド諸島先住民の大量死を憂えるラス・カサス神父らの進言でアフリカから導入されるようになったのだが、アフリカはポルトガルの管理下であって、需要に対して供給が不足していたのである。

ホーキンスが同じ目的の二度目の航海を企てると、これには大勢の投資家が出資した。1565年、ホーキンスは女王の持ち船である砲30門を乗せた700トンの大型船に乗り、他の小型船3隻を率いてカリブ海に戻ってきた。この時もシエラレオネで奴隷400人を積み込んできており、時には力づくでスペイン植民地に引きとらせ、第1回の航海をはるかに上回る利益を上げた。スペインは正式に英女王に抗議し、イギリスとの貿易を禁止したので、女王もいったんは3度目の航海を控えさせたが、ホーキンス自身は正当な商行為と考えており、結局女王も許可を出して1568年10月に3度目の航海に出て行った。しかし、3度目の航海は、スペイン植民地の守備隊とあちこちで小競り合いを繰り返した末に、ヴェラクルスの沖合でスペイン艦隊と正面衝突して大敗し、ホーキンスの乗っていた旗艦ミニオン号と小型船ジュディス号だけがかろうじて逃れることができた。このジュディス号の船長だったのがフランシス・ドレーク（1543頃～1596）で、港内での戦闘で旗艦もやられたか捕虜になったものと思い込んで報告のためにまっすぐイギリスに逃げ帰った。ミニオン号にはホーキンスを含む生存者200名ほどがぎっしり詰め込まれていたが、半数は上陸して投降し、ホーキンスとともに生きて帰ったのは15名ほどにすぎなかった。ヴェラクルス沖でのこの敗北は、イギリスの冒険者たちの感情を大いに傷つけ、英西関係を悪化させ、

イギリス側の新世界への遠征をあからさまに攻撃的なものに変えて行った。

イギリスの私掠船は拿捕の勅許状を与えられ、国家の名において活動した。勅許状には誰が敵であり誰が同盟者であるかが明記され、獲得した獲物の分配条件まで決められていたという。普通は90%を私掠船長が確保し、10%を女王に対する従属の印および法的保護への謝礼として差し出すことになっていた。

ホーキンは悪化する英西関係の中で、1571年にスペインによるエリザベス一世暗殺計画を阻止して女王の信頼を勝ち得、以来陸上で政治家としての活動に専念することになった。そして、そのあとの海上活を引き継いだのがドレークであった。

女王陛下の海賊ドレーク フランシス・ドレーク（1543頃～96）はイングランド南西部デボンシャー州の農民の出で、両親は当時興隆しつつあったプロテスタントの熱心な教徒になっていた。1549年エドワード六世による新教祈祷書の押しつけに対するこの地域のカトリック教徒の大反乱事件というのがあって、両親は住み慣れた故郷を捨ててプリマスに行った。フランシスはまだ5歳であった。10歳になると家計の助けに近所に住む老船長の持つ小さな帆船の下働きをはじめ、テムズ川はもとより、ネーデルラントやフランスの諸港を往来して船乗りとしての腕を磨いた。フランシスの腕にほれ込んだ老船長が、死の直前の遺言で手持ちの船をフランシスに遺贈してくれたため、フランシスは10代の若さで持ち船の船長になった。しかし、遠洋航海船による海外進出を望んでいたフランシスは、この船を売り払い、奴隷貿易で巨万の富を稼いだプリマスのジョン・ホーキンを訪ねてその傘下に入った。ホーキンの第3回航海に船団にドレークが一船長として参加していたことはホーキンの項で触れた。

ホーキンが自分の行動を海賊ではなく貿易行為と考えていたのと違って、後をついだドレークは過激な海賊行為を行った。1572年にはカリブ海最奥部のパナマ地峡に秘密基地を設けて正面からスペインの権威に挑戦し、大量の金銀財宝を奪取したうえ、これらをスペインから奪った艦船に満載して凱旋した。イギリスでは英雄扱いだだったが、こうもあからさまな行動に、スペイン側から名指しの死刑要求が女王に提出された。女王も正面からドレークの行為を是とするわけにはいかず、ドレークは3年ほど雲隠れして消息を絶ち、ほとぼりの冷めるのを待って、1577年に女王の前に再び姿を現した。当時のイギリスはまだ大国スペインに正面から挑む国力はなかったが、ドレークはアメリカの植民地を襲撃することでスペインに一泡吹かせる企てを密かに女王に進言した。その企てとは、大西洋を南西に下ってマゼラン海峡を通過し、そのあと太平洋を北上してスペインの植民地を襲撃・略奪して同じ経路で帰ってこようというものであった。うまくいけば前人未到の航海となる。スペインのフェリペ二世に散々不愉快な目に合わされていたエリザベス一世は、失敗すればドレークを見捨てるという条件で暗黙の了解を与えた。ドレークはこの冒険行に12か月ほどかかると見込んでいた。

行く先をエジプトのアレクサンドリアと偽り、ひそかに完全武装したドレークの5隻の船団がプリマス港を出港したのは1577年11月であった。航海中いろいろな事件があった

が、翌 1578 年 8 月 20 日、マゼランが 1520 年に通過したあと難路のため長らく閉ざされていたマゼラン海峡に、再びヨーロッパの艦船が進入して行った。海峡内は平穏だったが、海図のない危険な海域なので慎重に進み、12 日間をかけて海峡出口に無事到達した。問題はその後であった。出口付近で大嵐に逢い、海峡に入る前にすでに 3 隻に減っていた船団がさらに一隻を失い、ドレークが乗る旗艦ゴールデン・ハインド号は南西に流されたあと東に流され、結果として南極とフエゴ島の間の海峡を「発見」し、ドレーク海峡の名を残すこととなった。残る一隻のエリザベス号は、旗艦ゴールデン・ハインド号を見失ってイギリスに引き上げて行った。ドレークは大陸最南端の島陰で 50 日以上も嵐の治まるのを待ち、その地にエリザベス一世の名を刻んだ碑を建てた。のち 1616 年に、この地はオランダ人によってホーン岬という名を与えられた。

太平洋に入ってからドレークはチリ海岸沿いに北上し、あちこちのスペイン植民地を荒らし、財宝運搬船と見れば襲いかかって獲物を増やしていった。そして、たまたまサンフランシスコ付近で捕獲したスペイン船からフィリピン方面への海図を入手したことが、ドレークに太平洋横断に向かう決意をさることになった。

151 第四章 海賊船地球を回る



アメリカ沿岸におけるゴールデン・ハインドの航跡

北米大陸をおよそ北緯 48 度、今日のヴァンクーヴァー付近にまで北上したあと悪天候に遮られて反転し、サンフランシスコ北方の今日ドレーク湾と呼ばれているところで船の修理などを行った。そこから太平洋を西に向かい、北東貿易風によって 68 日間島影ひとつ見ることなく、フィリピンに近いパラオ諸島に到着した。その後、ミンダナオ島で飲料水を

補給して目的地のテルナテ島に赴き、ポルトガルの支配に反発していたサルタンの歓迎を受けた。ここで丁子6トンを積んでインド洋に抜けようとしたところで岩礁にぶつかり、沈没寸前になりながら奇跡的に立ち直ることができた。さらに香辛料などをたっぷり積み込んでインド洋をノンストップで突っ切ってアフリカ南端を回り、1580年9月26日にプリマス港に帰着した。しかし、出発の事情が事情だったからすぐには上陸せず、女王に帰国報告の手紙を書いて返信を待ち、「戦利品の見本をもってロンドンに急行せよ」との命を受けてから女王のもとに参上した。ドレークはイギリス人初、マゼラン艦隊に次ぐ二度目の世界一周航海者となったのであった。

他方、散々顔に泥を塗られたスペイン王は、ドレークがモルッカ諸島に向かったと知ると、ポルトガル王に逮捕を要請し、エリザベス一世に対しては、在ロンドンのスペイン大使にドレークが以前に奪った財宝の賠償請求をさせていた。このような事情があり、まだスペインと正面衝突するほどの力がないことを自認していたエリザベス一世は、表面をつくろって遠慮がちにドレークにナイトの称号を与えて功績を称えたのであった。

この後間もなく英西関係は風雲を告げ、8年後の1588年、イギリスを攻撃するために派遣されたスペインの誇る無敵艦隊を、英国側がイギリス海峡で劇的に破ってスペインにダメージを与え、以後次第に制海権がイギリスに移っていく。ちなみにドレークが世界一周航海で持ち帰った財宝は全部で60万ポンド相当と公表され、その半分が女王のものとなった。この額はイギリスの国庫歳入を上回り、1588年の対スペイン戦争の戦費の二倍に相当する額であった。女王はこれによって在外負債を清算しただけでなく、レヴァント会社（地中海貿易独占の許可を与えたイギリスの商人組合）に投資し、その利益がのちの東インド会社経営の基礎になったという（「海賊キャプテンドレーク」p171。）

太平洋航路の開発 ドレークは偶然の成り行きでマゼランに次ぐ二番目の世界周航者となったが、スペインはマゼラン後もマゼラン海峡の航路探索を続け、1525年にはマゼラン艦隊の生き残りのエルカノを含む七隻からなるガルシア・デ・ロアイサの船団を派遣している。この艦隊はマゼラン海峡の通過にも太平洋横断にも難渋し、ロアイサもエルカノも途中で病死、一隻だけがマルク（モルッカ）諸島のティドール島に辿りついた。テルナテ島のポルトガル人に対抗しようとしたが敵わず、メキシコに戻ろうとしたが、東からの貿易風に妨げられて香料島に逆戻りして降伏した。その後も何度かマゼラン海峡通過を試みたがことごとく失敗し、南米大陸南端を回る航路の開発を諦め、中米の西海岸からアジアを目指す太平洋航路の開拓に切り替えた。だが、アジアまでは行けても、季節風の関係で出発点のメキシコに戻る方法が見つからず、スペインのアジア進出はままたまならなかった。

これが解決したのは1565年であった。ロペス・デ・レガスピとアンドレス・デ・ウルダネーダがメキシコを発ってフィリピン諸島に到達し、セブ島にアジア初のスペイン人町を建設した。その直後の6月9日、ウルダネーダはセブ島を出帆し、北東貿易風を避けながら北緯42度付近まで北上し、いわゆる大圏航路をとって10月30日にアカプルコ港に帰還した。これによって太平洋の往来が初めて可能になり、1571年レガスピがルソン島にマニ

ラ市を建設した。間もなくアカプルコ〜マニラ間に定期航路が開かれ、この航路は18世紀末まで継続し、アメリカ大陸とアジアの連絡に大きな役割を果たしている（「大航海時代 p 144」）。ドレークは、こうしてスペインによって発見された太平洋航路の秘密をスペイン船から奪って世界一周に成功したのであった。

さて、カリブの海賊の第3段階（1620〜60）はオランダ船の時代とされるが、後述のとおり、1620年は清教徒がメイフラワー号でマサチューセッツに植民した年であり、すでにイギリスのヴァージニア植民地が置かれているなど、スペインとの関係も様変わりしているので、記述を省略する。いずれにしても、スペインの支配は1630年代にオランダ、フランス、イギリスの侵略者によってまず小アンティル諸島、次いで大アンティル諸島への侵入を許し、ついには大陸にまで新勢力の侵入が及んでいくのである。

アジアにおけるオランダ

オランダの初期の歴史は、今日のベルギー、ルクセンブルグ、北フランスの一部を含む低地帯ネーデルラントの歴史と一体である。この地方はドイツ、フランス、それに狭い海峡を隔ててイギリスという大国に囲まれた地域で、中世末期には神聖ローマ帝国の傘下にはあったが、諸侯が分立して政治的な力のバランスによって半独立状態にあった。南部のフランドル地方は毛織物工業で栄え、中世末期には海運の発展によってヨーロッパ商業の中心地としてシャンパーニュの地位を脅かす存在になっていた。北部のホラント地方は北海の鯨が《海金の鉾》といわれるほどたくさん取れ、塩漬けの保存食としてヨーロッパ中に需要があり、これによって国の基礎が築かれた。ライン川とマース川という二大長流の河口をもち、造船技術に優れ、物資の輸送でも財を成した。海上貿易の繁栄にともなって毛織物、絹織物、レンズ、時計製造、印刷業など、資源の乏しい国ゆえに、中継貿易に関連する加工、精錬、仕上げの工業に優れ、英仏に先駆けてアジア、アメリカ方面へ進出していった。Herring makes Holland, and Holland makes trade（鯨がオランダを生み、オランダが貿易を生む）といわれるゆえんである。スペイン王を兼ねた神聖ローマ皇帝の支配下にあったネーデルラントは、カルロス五世の引退によって帝国が東西に分立したとき（1556年）、西のスペイン・ハプスブルク家の所領となっていた。

プロテスタント派が多かった北部ネーデルラント（オランダ）は、カトリック強国スペインによる圧迫に反抗して、新教徒を中心に反乱を起こし（1568年）、1581年に北部7州が独立を宣言した。スペイン王フェリペ二世は反乱の新教徒軍の武力鎮圧とオランダを助けるイギリスに鉄槌を下すべく、無敵艦隊アルマダを英仏海峡に派遣したのだったが、これが無残な敗北（1588年）に終わった。スペインとの間に80年戦争（1568〜1648）と言われる長期の独立戦争が戦われたが、この80年間にオランダは飛躍的な発展を遂げる。スペインはオランダの貿易に痛手を与えようと、オランダ船のリスボン寄港を禁止したが、この禁令はさして効果がなかったばかりか、かえってオランダ人のアジア貿易への想いを掻き立て、東洋進出への機運をいっそう煽ることになった（科野孝蔵「オランダ東インド

会社)。スペインの没落は、オランダの独立に端を發したともいわれるゆえんである。

リンスホーテンの「東方案内記」 17世紀にヨーロッパで最もよく読まれたアジア紹介の書は、オランダ人ヤン・ハイヘン・フォン・リンスホーテン（1563～1611）の「東方案内記」である。リンスホーテンは1583年20歳のとき、ゴア大司教として赴任するヴィセンテ・ダ・フォンセッカの書記役としてゴアに同行し、1583～88の5年余を同地で過ごした。フォンセッカ大司教がインドからの帰任途中に死去したことを知ったリンスホーテンは、自身も帰国を決意するが、帰国を待つ間にフッガー、ヴェルザー両家の胡椒仲買人となって香料取引の実際をも体験した。1588年12月、両家の胡椒荷を宰領して帰国の途に就いたリンスホーテンは、セントヘレナ島まで帰ってきたところで暴風に会い、胡椒の荷を失った。その結果、1591年12月までこの地に滞在を余儀なくされ、1592年にリスボンに帰着し、諸事を整理して故郷オランダに帰ったのは同年9月のことであった。

ゴアはポルトガルのアジア戦略と貿易の中心基地であり、大司教の書記として上層から下層まで幅広い階層に接することができ、豊かな情報を入手することができた。帰国後自身のインド往復の旅の体験と、ゴア滞在中に知り得た知識と情報をもとに、ゴアの社会状況をはじめ、ポルトガルのインド支配の実態、東南アジアの地理・民族・歴史などをまとめたのが「東方案内記」である。大航海時代叢書（第1期8巻）に翻訳があり、本文だけで700ページを超える大作である。この本が重要なのは、アジア方面の貿易が当時ポルトガル王室に独占され、情報は厳重に秘匿されていたから、他国民にとってアジアは全く未知の世界にとどまっていたからである。アジアの情報は、ポルトガル人によってではなく、オランダ人によってヨーロッパにもたらされたのであった。

オランダは北極圏経由の東インド航路（北東航路）（中公小8 p 72）を開拓しようとして失敗していた時期であり、リンスホーテンのもたらした情報は貴重であった。スペインに反旗を翻したオランダは、ポルトガル王を兼ねるスペイン王によってリスボン港などへの船舶の寄港を禁じられ、まさに貿易拡大のためには、アジアに向けて独自に航路を開く必要に迫られていたからであった。

東方案内記は、1594年スペイン・ポルトガルと独立戦争を戦っていたユトレヒト同盟の議会において、向こう10年間は同盟各州内でのみ出版、販売、配布することが許されるとの条件を付されたうえで1596年に刊行された。

東インド会社とバタヴィアの建設 リンスホーテンの報告は、アジアの地誌のほかにポルトガル人による交易支配の実情を細かく紹介し、ポルトガルの勢力はオランダ人が信じるほど強力なものではなく、失政によって現地住民の憎悪を買っていることなども記されていた。オランダは、アジアへの進出を求めて事前調査のためにコルネリウス・デ・ハウトマンをポルトガルに送る。その後ハウトマンは、1595年4月、オランダ初のアジア向け船団4隻（総人員249名）の一隻の船長としてオランダ北部のテクセルを出港していった。彼らが出た航路はポルトガルが独占するインド航路を避け、喜望峰を回ったあとさらに

南下し、西風に乗っていきに東インド諸島の南に達し、14か月の航海で1596年6月23日、スンダ海峡に面するジャワ島のバンタムに入港した。バンタムは当時胡椒の集散地として重要な地で、ポルトガル人も土着商人もオランダに対して敵対的であった。ハウトマンはそれでも粘り強く交渉し、なんとか現地の首長と通商関係を結び、オランダを出発してから2年4か月後の1597年8月にテクセル港に帰着した。出発時249名いた乗員は壊血病や内部の対立で89名に減っていた。この航海による利益自体はさして多くはなかったが、自力で危険な航海を成し遂げた実績自体が重要で、本国で大歓迎された。（「絶対君主と人民」世界の歴史⑧） p 74。

科野孝蔵「オランダ東インド会社」によれば、ポルトガルが国家独占の交易をおこなっていたのと同じ、オランダの貿易は企業活動そのものであったから、ハウトマンの船団が出帆したあと、実に14もの会社が設立されて東インド貿易を始めている（1602年までに延べ60隻以上の船がアジアへ向かったという）。まず、1598年に喜望峯経由で2船団、マゼラン海峡経由でも2船団がそれぞれ東インド向けに出帆していったが、これらのうち最も成功したのが喜望峯経由バンタムに向かったヤコブ・ファン・ネック指揮下の八隻からなる船団であった。ファン・ネックはバンタムに交易所を開設し、四隻を率いてさらにセレベス、アンボイナ、バンダ諸島などを巡って1600年に帰国した。結果は、競って現地の物産を求めするために売値が上がり上げられる一方、季節風の関係で同時期に帰国船が集中するから積荷が値下がりするなど、競争の弊害が目立った。それだけでなく、オランダはまだアジアへの航海の知識も技術も未熟で、お互いに情報を交換して航海の安全を図る必要があった。そこで、1600年頃から合併して東インド会社を結成する検討がなされ、最終的に1602年政府からアジア貿易独占の認可を受けた「東インド会社」（正式名称は連合オランダ特許東インド会社）が設立されたのであった。「オランダ東インド会社」は出資者の有限責任性や株式制度の萌芽がみられ、会社企業の永続性とこれに応ずる諸機能の整備によって、世界初の株式会社とされている。

オランダはポルトガルが関心を示していなかったジャワ島を根拠地と決めた。東インド会社設立後の最初の船隊は1602年に出港し、バンタム（バンテン）に商館を置き、ここを拠点として活動した。1605年にはポルトガル人を香料諸島のテルナテ島から追放し、アンボイナ島を占領したのみならず、いたるところでポルトガル船を略奪するなどして香料貿易の実権を奪っていった。その後1610年にバンタム（バンテン）王の圧迫を受けたため、現ジャカルタの地にも商館を設けてこちらをアジア本社とし、1621年にバタヴィアと命名した。以後オランダはバタヴィアを拠点にアジア貿易を開発し、とくに日本との貿易を独占したことはよく知られている。

ちなみに、オランダ東インド会社設立に先立って、1600年にイギリスが「東インド会社」を設立しているが、この会社は、西インド方面での海賊行為で名を売ったジェームズ・ランカスター船長がエリザベス一世の許可を得て、イギリスとして初めて東インドに船団を派遣するために作られた一航海だけの会社であった。雑多な出資者280名による68,000ポ

インドを得て出港し、儲けを分配したら解散する予定の会社であったから、二度目の航海を計画したときには大いにもめたという。結果として最初の13回は一航海で清算する方式を継続し、1613年にオランダにならって合本企業^{ジョイントストックカンパニー}制に改め、アジアにおける貿易をオランダと争って一時は日本とも交易関係を結んでいた。しかし、アンボイナにおいてオランダがイギリス商館員を皆殺しにする事件（アンボイナ事件）が起こり（1623）、以後イギリスは日本を含む東アジア貿易から撤退し、インドに拠点を置いてインド綿布を交易の主要物資とするよう切り替えた。それ以来イギリスはインドとの結びつきが強くなり、イギリス東インド会社は商人から統治者へと性格を変えていくのである。

リーフデ号の日本漂着 他方、ヤコブ・ファン・ネックと同じ1598年、マゼラン海峡経由で東インド（アジア）に向かったヤックス・マフーを指揮官とする5隻の船団は、悲惨な運命をたどった。嵐でマゼラン海峡を抜ける前にちりぢりになり、万一の場合落ち合うと決めていたペルーの海岸に現れたのは旗艦のホープ号とリーフデ号の2隻のみであった。ほかの3隻のうち一隻はマゼラン海峡を逆戻りしてオランダに帰り、一隻はマストや帆が大破して漂っているところをスペイン船に拿捕され、残る一隻は大胆にも西へ航路をとって香料諸島に到達してポルトガル船に捕えられた。同船には出港時86名の乗組員がいたが、脱獄に成功した6名だけがかろうじて故郷の土を踏むことができた。

さて、太平洋で再会したホープ号とリーフデ号はこのあとどうするかを協議した結果、日本を目指すことに決め、1599年11月末に未知の世界に乗り出していった。日本を目指した理由は、積荷が毛織物のラシャがほとんどで、熱帯の香料諸島では売れるはずがなく、フィリピンはスペイン艦隊に遭遇する危険があったからであった。だが、太平洋の航海はマゼランの時と違って平穏な航海は短く、どことも知れぬ海域で暴風雨に会い、リーフデ号の目前でホープ号は沈没して姿を消してしまった。リーフデ号は大海原に一隻だけ取り残され、頼れるのは英人航海士ウィリアム・アダムズだけであった。身体強権で沉着なアダムズのおかげで、リーフデ号は飢えと病気で瀕死状態の24名の生き残りを乗せて、1600年4月12日、ふらふらと豊後の臼杵湾に漂着したことは日本史上で有名である。

ウィリアム・アダムズを主題にしたジャイルズ・ミルトンのノンフィクション「さむらいウィリアム」によれば、オランダの船団に英人ウィリアム・アダムズ（三浦按針・1564~1620）が乗船することになったいきさつは概要以下のような事情であった。アダムズはイングランドで造船と操舵術を学んで航海士の資格を取り、1588年から若くして貨物船の指揮を任せられ、イギリスがスペインの無敵艦隊と戦った時は、病気や負傷者のための物資輸送に従事していた。その後、貿易会社に勤務して10年間イギリスと北アフリカ海岸との貿易船に乗務していたが、単調な仕事に飽きが来ていた。ちょうどその頃、オランダが東インド方面に極秘に商船団を派遣する計画を立てて優秀な航海士を探しているという話を聞きこみ、迷うことなくこれに応募して採用された。これが彼の運命を変え、残る生涯を日本で過ごし、骨を埋めることになったのであった。リーフデ号の壮絶な航海の実態が後世に伝えられたのはアダムズの手記によるところが大である。

当時ポルトガルとスペインは航海に必要な情報を秘匿するだけでなく、植民地に他国船が接近すれば、食料・薪水を与えるどころか攻撃して拿捕する方針を取っていた。この時点でまだオランダは遠洋航海の知識に乏しかったのに対し、イギリスはホーキンスやドレーク以来の遠洋航海の知識の蓄積があった。すでに航海学を教える学校が出来ており、アダムズはその最初の学生の一人であった。オランダ船の雇われ航海士として活動したアダムズの冷静かつ果敢な処置が、リーフデ号と彼自身を生き残らせたと言える。ちなみに、この時代、生きて帰れぬ可能性が極めて高い航海に参加する船乗りたちは、幹部乗務員を除き、無理矢理に町の酒場からさらわれたり、騒ぎを起こして投獄されていた者たちを牢から引き出して強制的に船に乗せて働かせたりすることが多く、同書にはそうした実情も述べられている。 p 59

なお、リーフデ号と同時期にマゼラン海峡を經由したもう一つの船団を指揮したオリヴェ・ヴァン・ノールト（1558~1627）は、マゼラン海峡を通過し、太平洋を横断してフィリピンに達した。4隻のうち嵐で2隻を失い、スペイン船とマニラ湾で交戦して1隻を失ったが、なんとか喜望峰を回って、出帆後3年目の1601年8月26日にロッテルダムに帰着した。ノールトは、マゼラン、ドレークに次ぐ3番目の世界一周航海者となり、「世界周航記」を出版した。

北アメリカ大陸へ

アメリカ大陸はコロンブスが発見するまでユーラシア大陸の文明から孤立していたが、それでもノルウェーのヴァイキングの一派が10世紀にアイスランドとグリーンランドに植民し、11世紀初頭には、北アメリカ大陸の北東端に達していたことが知られている。アイスランドを除き、植民者がイヌイットに殺されて失敗に終わっているが、これらが最初のヨーロッパ人によるアメリカ大陸との接触であった。ロデリック・ナッシュ「人物アメリカ史」の言葉を借りれば、まだ十字軍以前の行き当たりばったりの冒険行の結果に過ぎず、そうした発見がヨーロッパにとって意味を持つには機がまだ熟してはいなかった。 p 25

コロンブスはルネサンスが進行する中で、事前に調査研究を行ってアジアを目指しながら、結果としてアメリカ大陸の発見者となった。帰国したコロンブスが持ち帰った情報は全ヨーロッパを震撼させた。アジアとの直接交易を求める声はもとより、ルネサンスの好奇心と政治的野心が加わって、コロンブスの報告は高圧化していた人々の想像力に見事に点火したのであった。

イギリス、フランス、オランダの北米進出 では、ポルトガルとスペインが大西洋への進出に熱中していた頃、他のヨーロッパ諸国は何をしていたのか。国家統一ができずに小公国に分立したままのドイツとイタリアには、海外遠征のような大規模事業に乗り出す力がなかった。フランスとイギリスは100年戦争（1337~1453）を戦ったあと、イギリスではさらにバラ戦争（1455~85）と呼ばれる内乱が続き、ヘンリー七世（在位 1485~1509）の即位によって、ようやく中央集権化の道が開けたばかりであった。フランスはシャルル八

世（在位 1483~98）からルイ 12 世（1498~47）の時代にかけて、イタリアの領土をめぐる戦争を続けており、両国とも大西洋世界で起こっていることに関心を払う余裕がなかった。

それでもコロンブスのアメリカ発見（実際にはカリブ海の島々だったが）に触発されて、イギリスもフランスも東方との貿易に関心を示し始めるが、当面はポルトガルやスペインの権益が確立していない北方経路で、アジアに抜ける航路を見つけようとしていた。その先駆がジェノヴァ生まれイギリス人ジョン・カボット（ジョヴァンニ・カボート）（1450~99）で、彼は 1497 年西へ向かい、ノヴァ・スコシアと思しき土地に到着している。さらに 1509 年には、息子のセバスチャン・カボットがロンドン商人の支援を受けて、北方からアジアへの航路を探すべく出発し、今日のハドソン湾に入ってカセイ（中国）に抜けるルートを発見したと信じたが、乗組員の反乱のためそれ以上進めずに引き返している。しかし、カボット父子の探検の成果は人々の注意をひかず、そのまま打ち切られた。

次いで、フランス王フランソワ一世（在位 1515~47）の依頼を受けたイタリア人ジョヴァンニ・ダ・ヴェラッツァーノ（1485~1528）が、ヨーロッパ人としては初めて北米の東海岸を探検した。大西洋を横断して今日のケープ・フィアに到達し、しばらく南方を探索したあと北方に転じ、海岸沿いにニューヨーク湾に入り、ノヴァ・スコシアからニューファウンドランドを経由してフランスに戻っている。1530 年代に入り、やはりフランソワ一世の命を受けたジャック・カルティエ（1491~1557）が北西航路（北米大陸を横断して太平洋に至る水路があると信じられていた）を探索した。彼は 1534 年にニューファウンドランドからセントローレンス河流域を探検したあと、1535 年、1541 年と 2 回にわたって内陸深く探検し、北米大陸内部をフランス領とするきっかけを作った。彼の後をついだサミュエル・ド・シャンプラン（1567?~1635）は、1603 年に初めてセントローレンス河に入って以来、この流域の探検を続け、1608 年にケベックに植民市を建設し、1613 年から 1619 年にかけて五大湖経由ミシシッピ川に抜け、広大な北米大陸内部にニューフランス植民地を形成することに成功した。

オランダはというと、イギリスのモスクワ会社に雇われて 1607 年と 08 年の二度にわたって北東航路（北極海を横断してアジアに抜けるルート）を探索して失敗していた英人ヘンリー・ハドソン（1560 頃~1611?）のハドソン河口とその流域の探検（1609~11 年）を支援して、ニュー・ネーデルラント建設への足場を固め、この地域を植民地化し、1625 年にはニューアムステルダム（現ニューヨーク）を建設した。

イギリスの東海岸植民地 中南米のスペイン植民地の北限ははっきりしておらず、フロリダ以北は事実上政治の空白地帯であった。エリザベス一世の寵臣ウォルター・ローリー（1552~1618）が、1584 から 87 年にかけて現在のノースカロライナ州沖のロアヌーク島に進出し、自分に与えられたこの土地をエリザベス一世にちなんでヴァージニアと命名して植民しようとした。しかし、1602 年、ここに残した者たちは現地住民に襲われて全滅していたことを確認し、ローリーは以後北米への植民事業から撤退してしまった。

結局アメリカ大陸への植民に出遅れたイギリスは、スペイン、フランス、オランダの影

響の及んでいない東部海岸沿いに進出することになり、1606年12月、ジェームズ一世の特許を得て設立されたヴァージニア会社（最初の名前はロンドン会社だった）によって最初の移民105人がヴァージニアの地に送られ、これが北米におけるイギリス植民地の始まりとなった。彼らはジェームズ川を50kmほど遡ったところにジェームズタウンを開いたものの、過去の多くの植民地失敗の例のとおり、半年後には飢えとマラリアで半分以上が死んだ。それでも指導者のジョン・スミスの努力と先住民（ポーハタン族）の協力のおかげで町は生き延び、ヴァージニア植民地を維持することができた。タバコ栽培に成功したジョン・ロルフがポーハタン族長の娘ポカホンタスと結婚して友好関係を維持しえたのも成功要因のひとつであった。1619年には住民代表による議会が招集され、植民地人に本国人と同じ自由が保障された。それ以後メリーランド植民地、ノースカロライナ植民地が作られ、北米大陸東海岸南部沿いに次第に植民地が増えていった。

これとは別に、1620年に北部のニューイングランドに清教徒の一団がメイフラワー号で到来してプリマス植民地を建設し、ここからマサチューセッツ、ロードアイランド、コネティカット、ニューハンプシャーなどに植民地が広がっていった。

大航海時代叢書：航海記・旅行記の氾濫

マゼラン以降も16～17世紀を通じてヨーロッパ人による世界発見熱はとどまることを知らなかった。それまでの時代にはなかった地球規模による諸民族の接触が始まり、航海者たちはそれぞれ各国各地で遭遇した諸民族・諸風物について記録し、それらの多くが出版され、外部世界への旅行記・旅行案内書が氾濫した。例えばハルン他による *The Oxford Companion to Travel Writing* (2002) の「1500年～1700年にイギリスで出版された旅行記・航海記の種類別出版数」（中央公論社「ロビンソン・クルーソー」訳者解説に掲載のものを借用）には、英語のオリジナルと外国ものの翻訳が併掲されている。ヨーロッパ外への旅行記について地域別に多い順は、「北アメリカ」が英語139種に翻訳7種、以下同様に「中東」33種と20種、「アフリカ」30種と15種、「東インド」25種と19種、「南アメリカ」18種と15種、「西インド」24種と7種、「東アジア」2種と23種、となっている。大航海時代はヨーロッパによる世界制覇の始動時期であり、ヨーロッパ人にとって心躍る展開であったから、早いうちから航海と発見の記録を整理する努力も始められていた。このような作業が同時進行的に行われていること自体がヨーロッパ文明の特徴であり、先進性と言えるのかもしれない。

航海記の集大成 大洋を渡り未踏の大地に分け入った「発見者たち」はさまざまな報告・記録をヨーロッパにもたらし、旧世界の人々は珍しい自然や文化の諸相に目を見張った。早くもヴェネチアでラムージオ（1485～1557）がこれらの記録を整理して「航海＝旅行記全集」（1550～59）という大型全集を刊行している（1563～1606に刊行された増補版で3巻、本文1171ページ）。ラムージオからおおよそ40年遅れて、1598年にイギリスでリチャード・ハクルートによる「イギリス国民による航海・旅行記・発見について」（本文825ページ）が刊行

される。イベリア半島両国に追いつき追い越せが国家課題であった後進国イギリスの愛国心に駆られて、ハクルートはその後 10 年間にわたって資料の収集や翻訳を続けて増補版を作成し、さらにその作業は後継者を得て膨大な記録集成が達成される。その過程でイギリスのみならず、ヨーロッパ人すべての航海の記録を網羅することを目指すようになり、バーチェスの「イギリス国民および他国民のなした航海と旅行の歴史」(1625 年)が刊行された。同企画は最終的に各巻 500~600 ページの全 20 巻に及び、それまでにヨーロッパが獲得した外部世界の知識の集大成となった。さらに、バーチェス版以降の航海と探検の成果を中心にチャーチル版「航海・旅行記叢書」全 4 巻が刊行され(1704 年)、大航海時代と呼ばれる 1500~1700 年の 200 年間のヨーロッパ人の世界進出の歴史が記録にとどめられたのであった。

日本では、これらの資料をもとに基本的な文献を網羅した「大航海時代叢書」第 I 期全 13 巻、第 II 期全 25 巻が岩波書店から刊行され、冒険者たちの苦闘の記録、知性の発露を詳細な解説ともに日本語で読むことができる。

増田義郎は、これらの諸記録に現れた西欧人的視点からの観察は、歴史的に考えると、単なる現代の学的資料という以上の意味があるという。なぜなら、ルネサンス以後のヨーロッパの近代史を特色づける非キリスト教世界に対する蔑視と、それとは逆に、非ヨーロッパ文化、ヨーロッパ文化の別なく、さまざまな文化形態の並存を承認する、文化に対する没価値的な相対観という二つの矛盾しあう態度の萌芽がすでに見られるからだという。

ユートピア旅行と月世界探検

自身の住む場所からどこか遠くへ移動する。旅には常に空想が伴い、非日常が伴う。古来プラトンの「理想国家」と「アトランティス島」(地中海の外の大西洋にあったとされる大陸のように大きい島)をはじめ、7 世紀の「聖ブレンダヌスの島伝説」(アイルランドの修道士ブレンダヌスが 17 人の修道士と小舟で大洋を 7 年間航海して約束の島を発見したとする伝説)、8 世紀の「シボラの七つの都の島伝説」(ポルトガルの大司教がイスラム侵入時に他の 6 人の司教とともに男女の信徒を率いてとある島で七つの都を建設したという伝説)などの想像の国があり、さらに 12 世紀には飢えを知らぬ「飽食の国」伝説などもあって、どこかにあるであろう楽園に対する人々の幻想を刺激してきた。

他方、中世末期に東方への旅行が実現し、見知らぬ国々のエキゾチックな空想をかきたてる面白おかしく脚色された東方旅行記や、旅行記を装ったマンデヴィールの創作「東方旅行記」などが生まれ、多くの読者を楽しませるようになっていた。

だが、どことも知れぬ中世までの楽園物語や空想物語は、実際にアジア、アフリカ、アメリカの国々や島々を訪れ、現地人と接触するようになってその形式が一変する。トマス・モアの「ユートピア」(1516)は、すでに新世界への航海に出かけて新しい島を発見するという現実の旅行記の枠組みによって語られている。《航海に出かけて新世界を発見》というパターンは、カンパネラの「太陽の都」(1623)、ベーコンの「ニューアトランティス」(1624)

などに受け継がれる一方、近代科学の発展や地動説を前提にした空想科学小説のはしりというべき宇宙への旅行にまで発展する。ここでは、岩波書店による「ユートピア旅行記叢書」により、17世紀に現れた月世界旅行について概要を紹介しよう。

ゴドウィンの「月の男」 月への旅行を題材にした最初の作品は1638年にイギリスで刊行された2編の月世界物語である。ひとつがジョン・ウィルキンズ（1614~72）の「月世界発見」であり、続いて数か月後にフランシス・ゴドウィン（1562~1633）による「月の男：俊足の使者ドミンゴ・ゴンサレスによる月世界旅行譚」が発表された（ちなみに「月の男」とはスペインでは月の黒い影のことを言い、日本のうさぎの餅つきなどに相当する p31）。前者は科学的に月を説明しようとしたものだが、後者は旅行記としての現実性に即して叙述されている。日の目を見たのはウィルキンズのほうが先であるが、ゴドウィンの「月の男」は著者の死後5年たって出版されていることから、原稿が完成したのはゴドウィンのほうが先とも考えられる。訳者解説によれば、ゴドウィンがクライストチャーチの学生だった1578~84年にすでに構想ができていたという説もあるが、序文にガリレオの望遠鏡による月の観測（1609）が言及されているから、完成は早くても1610年以降であろう。物語は、主人公のスペイン貴族ドミンゴ・ゴンサレスが一人称で語る形で進行する。概要はおよそ以下のとおりである。

主人公ドミンゴ・ゴンサレスは1552年、17人兄弟の末子としてセヴィリヤに生まれ、長じてもこれ以上ないといわれるほど小柄だった。1568年アルバ公ドン・フェルナンドがネーデルラント総督として派遣されることになった時、これに加わるべくサラマンカ大学を飛び出し、フランスを通り抜けてアントワープに行く。ちなみにサラマンカ大学はスペイン最古の大学で（1260年設立）、コロンブスが講義したことがあり、コペルニクスの理論にもとづく天文学講義を最初に行った大学として知られている。さて、ゴンサレスはオランダ独立戦争をスペイン側で戦って戦功をあげ、アルバ公の信任を得ることができた。1573年には豊かになって故郷に錦を飾り、リスボンの資産家の娘と結婚して満ち足りた生活を送っていた。ところが1596年、些細なことが原因で親族の一人を決闘で殺してしまい、義父のいるリスボンに逃亡する。リスボンで東インド諸島行きのポルトガル商船に乗ってインドへ行き、ダイヤモンド、エメラルド、真珠などの宝石に投資して大儲けするが、帰途喜望峰を回って間もなく重い病にかかる。半死半生の状態で地上の楽園セントヘレナ島に辿りつき、ここで長期にわたって静養する。島で雛から育てた25羽の雁と紐と滑車を利用して飛行装置を作り、雁の力で空を飛ぶことに成功する。装置発明後ポルトガル船の入港を辛抱強く待ち、船長に頼んで密かに雁と飛行装置を船に積みせてもらって帰郷の航海に出る。しかし、カナリア諸島のテネリフェ島沖まで来たところで英国艦隊に襲撃される。船は大量の積荷で動きが鈍く、軽快な英国艦船に敵対できず、船荷全部を奪われるよりはとテネリフェ島に上陸を試みて暗礁に乗りあげる。主人公はきわどく飛行装置で上空に飛び上が

り、島の高山に着陸する。高地にはスペイン人ではなく原住民が住んでおり、彼らに襲撃される寸前に再び上空高く舞い上がる。地球の磁力を超える高度にまで上昇し、12日間ほどの宇宙旅行の末、ついに月にまで達するのである。

月には地球人に似た人間がおり、一人の帝王と29人の地方君主がいる。地方君主の一人に賓客として迎えられ、地球の暦で1年と3か月ほど滞在するが、雁が死んで帰れなくなることを恐れ、引き留められるのを振り切って飛び出し、中国のパクイン（北京）に近い山中に帰着した。北京でイエズス会の神父たちが布教活動をしていると聞き、官吏の許可を得て彼らに会いに行く。故郷に戻れる見通しが得られ、パントファ神父（マテオ・リッチの布教を手伝ったイエズス会士）ほかのイエズス会士の前でこれまでの冒険談を語り、帰国の機会を待つというところで話が終わる。

大航海時代の展開を追究してきた後で本作品を読むとなかなか興味深い。解説にゴドウィンが本書を書くにあたって参考としたであろう文献が列挙されており、東インド航路上の出来事はリチャード・ハクルートの「英国国民の主要な航海と旅行と発見」、セントヘレナ島の記述はジェームズ・ランカスターの「東インドへの航海」、中国の描写はマテオ・リッチの死後ニコラ・トリゴーがリッチの手記をまとめた「キリスト教中国遠征記」などを参照したと考えられている。

「月の男」を読んで注目したい第一の点は、大航海時代の世界の状況を巧みに物語るべく工夫されていること。これはイギリス人の作家があえてスペイン貴族を主人公に据えていることに端的にうかがえる。ポルトガルの資産家の娘と結婚させることで南回り東インド航路の船に乗る手だてができ、ポルトガル領のセントヘレナ島（地上にある唯一の楽園と紹介されている）で病を癒し、雁を使った飛行装置を発案する。スペイン領のカナリア諸島付近で英国艦隊の襲撃にあつて船は沈没するが、英艦隊は意外にやさしくて溺れる者を次々救い上げると書くのは、著者がイギリス人ならではの記述であろう。月からの帰還では中国に降ろし、イエズス会士の活動などについて語らせるのも、主人公がイギリス人では難しいであろう。

第二の点は当時の最新科学の知識をフルに活用して宇宙旅行を説明している点である。冒頭に『読者諸賢へ』という前書きがあり、「月の居住性もかつてあり得ないとされた対蹠人（地球の反対に住んでさかさまに歩いているとされた人）と同じで、コロンブスのわずかな見聞がアメリカの植民地を生み、未知が既知に変わったように、今やわれら《ガリレオたち》は望遠鏡の助けを借りて、太陽の黒点や月の山並みを観察するに至っております…」と書いている。月での滞在物語はさすがに荒唐無稽だが、地球と月との往来を語る際には、コペルニクス（1473~1543）、ガリレオ（1564~1642）、ケプラー（1571~1630）らによる地動説や天体望遠鏡による観察などが語られ、地球の引力や磁力などの物理学の知識も披露する。

第三の点は、宗教的に聖書の教えにもとる物語を書くことへの危惧である。天文学の成果を踏まえて書かれたものであるが、コペルニクスの地動説を支持して曲げなかったジョ

ルダノ・ブルーノが火刑に処せられたのが1600年、ガリレオ・ガリレイが異端審問で有罪判決を受けて地動説を放棄したのが1633年であるから、ゴドウィンが本書を構想ないし執筆中の出来事である。したがって、主人公のゴンサレスが月まで往来して多くの自然の秘密を知ったとはいえ、「これを利用することが我が国（スペイン）の政策と統治のために有効であると認められるまでは公表を控えねばならず、それにもましてカトリック教会の信仰と教義に照らして不利益にならぬかどうか教会の神父たちの判断をも待たねばなるまい」と書く。実際、この時点で地動説にもとづく小説が公表できたのは新教国イギリスならではのことが、それでも印刷に付されたのはゴドウィンの死後5年を経た後であった。ただ、「月の男」にはフランスのユートピア旅行記のもつ社会や宗教への批判は見られず、むしろ教養書の趣があり、第二版が1657年、第三版が1686年に刊行され、大いに好評を博したことを窺わせる。その間1648年には仏訳が刊行されるなど大陸でも受け入れられ、1768年までに少なくとも4か国語で合計25版が出版されたという。

シラノ・ド・ベルジュラックの「月世界旅行」 日本ではエドモン・ロスタン(1868~1918)の「シラノ・ド・ベルジュラック」(1897)の芝居や映画によって、ゴドウィンの「月の男」よりシラノの「月世界旅行」のほうがよく知られている。同じ空想旅行でもシラノのは、絶対主義時代のカトリック国フランスという制約の中での政治体制批判、宗教批判の書である。設定したユートピア（この場合月世界）との対比によって現状を批判するという16、17世紀特有の文学ジャンルの代表作のひとつである。それゆえ、ゴドウィンと違って月に至る過程には重きを置いていない。主人公は露を満たした瓶を沢山身体に括り付けたうえで太陽を浴びて空中高く飛び上がり、落ちたところがフランスの植民地ニューフランス（カナダ）だったというのが現実世界とのほとんど唯一の関わりである（地球への帰還ではイタリアに落下する）。そしてケベックで新しい飛行装置を作って宇宙に飛び出していく。

月の世界に到達するとそこは「月にある地上の楽園」で、ここにこれまで来た人間はアダムとイブ（二人は地球に追放された）、エノク、エリア、聖ヨハネと主人公の6人だけである。この楽園で主人公は、知恵の果物を口にして楽園から追放され、月の住人の四足の人獣の間に放り出される…。この部分はシラノの創造というより、昔から月に「地上の楽園」があり、そこで至福者が審判の日を待つという言い伝えがあったのをパロディ化したもの。そのあとで月の四足の人獣たちとの世界の創造から理想の社会まで自由に論議するという趣向である。

シラノ・ド・ベルジュラック(1619~1655)は、16世紀のルネサンスの科学精神を18世紀の啓蒙精神につなぐ17世紀の自由思想家(リベルタン)の一人で、「月世界旅行(正式の名称は月の諸国諸帝国の物語)」(1657)はその代表作のひとつである。ゴドウィンを読んだから書かれたものであることは明白である。というより、作品の中にゴドウィンの「月の男」の主人公を指すらしい「鳥に運ばれてやってきたカスティリア生まれの小男のスペイン人」が登場して、長々とシラノの主人公と会話している。その中で月の男に「宇宙が人間を作ったのは、ただわれわれに奴隷を与えるためなのですぞ」(赤木昭三訳)などと言わ

せている。全体として聖書の内容や社会の在り方に関するパロディ、風刺、皮肉、逆説、エトセトラのオンパレードである。

シラノの「月世界旅行」は「月の男」の仏訳が出た 1648 年以降に書かれ、1650 年に出版された友人の詩集の中で言及されていることから、1650 年には完成していたと考えられる。実際にはシラノ夭逝後 2 年たった 1657 年に、友人ル・ブレによって「月の諸国諸帝国の滑稽物語」というタイトルで刊行された。「月の諸国諸帝国」（赤木昭三訳）の訳者解説によれば、当時すでに僧職にあったル・ブレが当局を刺激する心配のあるリベルタンの思想をことごとく削除して刊行したため、200 年以上も単なる SF 的滑稽譚として読み継がれてきた。つまり、ロスタンのシラノ像も毒を抜き取られた無害な作品をもとに作り上げられたものなのであった。20 世紀に入ってル・ブレのテキストとは似ても似つかぬ未削除本がパリで 2 部、ミュンヘンで 1 部、合計 3 部発見され今日の姿に改められたのだという。

話の内容はばらばらに展開するが、取り上げられている内容は、1) 天動説とこれに支えられたキリスト教的な人間中心主義の否定、2) キリスト教の説く神による世界創造と神の摂理の否定、3) キリスト教の説く人間の靈魂の精神性と不死性の否定、4) 神の存在の否定、5) キリスト教の禁欲的な道德の否定、6) 王権と父権の否定、といった当時の常識に真っ向から反対する議論を展開している。このままでは当時のフランスでまともに出版できなかったのも無理はない。事実この時期カトリック教やキリスト教、あるいは宗教一般を批判する言動は厳しく禁じられており、相容れない思想信条をもつ人々に残された手段は、新教国オランダなどの外国で出版してひそかに持ち込むか、外国でも出版が難しいものは手書きの写本として流布させるしかなかった。赤木によれば、直接的な宗教批判は地下写本で、新しい政治や社会制度の提案とそれに付随する宗教論議は「ユートピア旅行記」として出版するというように、棲み分けが出来ていたという。

フランスの 17 世紀はユートピア旅行記の宝庫で、100 種類ものユートピア物語が出版されたというが、川端香男里「ユートピアの幻想」によれば、フランスのユートピア物語は体制が固まってしまって、モアの時代のイギリスのように新しい体制創造の夢がみられず、風刺が主体にしかなり得なかったのだという。p 122.

英仏を中心に沢山のユートピア・空想物語があり、その主要なものが岩波書店の「ユートピア旅行記全集」（全 15 巻）に翻訳されている。ちなみに、アラブ人の空想的旅行記「船乗りシンドバッド」は、まさにこの時期、17 世紀末に、フランス人アトントワーヌ・ガランが発見して紹介し、その後アラビアン・ナイトとしてエキゾチスム豊かな読み物として次々翻訳され広くヨーロッパに伝えられたのであった。

ロビンソン・クルーソー 本章の最後に、実話と小説が交錯したロビンソン・クルーソーの例を見ておこう。ダニエル・デフォー（1660~1731）は 17 世紀末期の政党や宗派対立の中でジャーナリストとして活動し、政治パンフレットや風刺詩を書いて投獄もされているが、58 歳で書いた「ロビンソン・クルーソー」（1719）によって一躍有名になった。数ある空想的旅行記の中から忽然として近代小説の先駆というべき「ロビンソン・クルーソー」

が誕生したのである。クルーソーのモデルは、18世紀の初頭にイギリスの私掠船長にして探検家のウィリアム・ダンピアの2度目の世界周航船団の一隻の航海士だったアレクザンダー・セルカーク（1676~1721）の稀有な体験であった。セルカークは、1704年9月、食料と水を補給するためにサンチャゴ沖のファン・ヘルナンデス諸島の無人島に上陸した際、水漏れもする老朽化した乗船が長い航海にもはや耐えられないと判断し、島に残って別の船を待つことを船長に提案した。彼の提案は入れられず、結果として衣類、寝具、火縄銃、いくらかの火薬と弾丸、手斧、ナイフ、やかん、聖書、計測道具、数冊の本などとともに無人島に一人残され、1709年1月に救出されるまでの4年4か月をたった一人で生き延びたのであった（乗船は彼が恐れたとおり沈没した）。

ダニエル・デフォーの「ロビンソン・クルーソー」はこの事件後に書かれた創作であるが、読者はこれがセルカークの実話と受け取ったほど内容が真に迫ったものであり、大ベストセラーとなった。ちなみに、セルカークの孤島での生活を世に伝えたのは、彼を救出したウッズ・ロジャース船長の手記「世界周航記」（1712）であり、セルカークの語った孤島での生活をこまごまと紹介している。ついでジャーナリストのリチャード・スティールが自身の新聞「ザ・イングリッシュマン」（1713年12月3日付け）にロジャースの提供した情報を書き直して再掲した。デフォーがこれらから刺激を受けたであろうことは容易に推測できるが、一読してわかるとおり、《見てきたような嘘をつく》筆法で、主人公の生まれから航海の事情、孤島での生活など細部を積み上げて事実らしさを生み出している。デフォーがセルカークに会って話を聞いたかどうかは確認されていない。むしろデフォーの蔵書目録から、彼が世界地理、探検、航海、通商などに関して膨大な情報をもっていたことがわかっており、セルカーク生還がヒントにはなったとして、デフォーの長年の研究に裏打ちされた物語であり、新しい研究はセルカーク以外にデフォーがどのような情報を使ったかに向けられているという（増田義郎）。

独力で孤島の生活を築いていく過程が人間の経済生活発展の寓意とみられ、カール・マルクス、マックス・ウェーバー、シルヴィオ・ゲゼルらが経済論の中で『クルーソー』を取り上げていることはよく知られている。旅行記という文学ジャンルが氾濫した時代に、旅行記を超える、あるいは旅行記という形を借りた新しい小説が誕生したのであった。

ちなみに、セルカークが過ごした無人島マス・ア・ティエラ島は、1966年にロビンソン・クルーソー島と名付けられ、今日では600人が居住しているという。

なお、ほぼ同時期に現れ、「ロビンソン・クルーソー」と対比されるジョナサン・スウィット（1667~1745）の「ガリバー旅行記」（1726）は、ともに単純化されて子供向きの小説として後世に長く読み続けられることになったが、両作とも児童向けの読み物とは程遠い。とくにガリバーの方は痛烈な社会風刺であり、小人国、巨人国、空飛ぶ鳥の国、馬の国への航海記の形をとっているものの、全体が人間そのものへの痛罵の趣がある。両者が近代小説の先駆けとされるゆえんである。

さて、大航海時代以来、ヨーロッパの人々は探検・冒険の航海を記録し、新しい国々

や島々の情報をもたらし、世界はヨーロッパ人にとって親しいものへと変わっていく。とはいえ、大洋上の航海は相変わらず危険を伴い、少なくとも遊びや楽しみのために船旅をする人たちはまだいない。観光目的の大洋航海が始まるのは 18 世紀末の蒸気船の投入以後と断言していいだろう。そして、その旅行はすでに近代ツーリズムの範疇に入るのである。

2013 年 3 月 7 日